

「知の蓄積と活用にむけた方法論的研究」部門 2013年度からの活動報告

嶋 崎 尚 子

Report on Activities (2013-2016)

Naoko SHIMAZAKI

目的

本部門の目的は、第一に、人文科学や社会科学の諸領域における知の生産、蓄積、活用のプロセス、およびこのプロセスで用いられる多様な資料やデータの収集と取り扱いの方法について学横断的に検討すること、そして第二に、各領域で実践され形成されてきた知の生産手法、資料やデータの収集・取り扱いの方法および方法論、分析枠組みについて相互理解を深め、新たな比較研究枠組みの構築にむけた相互補強的な研究交流をおこなうこと、の2点である。本稿では、これまでの活動概略を報告する。

研究会

2013年夏から実質的な活動を開始し、2017年夏までに研究会（10回）ならびに講演会（1回）を開催した（詳細は表1）。研究会は、第1回から5回は、アーカイビングに取り組んでいる学内研究者が、その実践内容を紹介し、そこでの課題を具体的

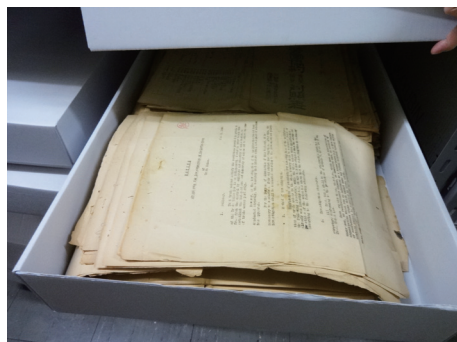
に提示し、解決にむけた方策を中心に議論する機会とした。その中間総括を第6回で行い、現用価値と歴史的文化的価値、公共的価値と学術的価値をあわせもつ社会的記憶装置としてのアーカイブズに関する議論が展開された。

その議論をふまえ7回以降の研究会は、海外を含む学外の研究者、専門機関のアーキビスト、若手研究者を中心に展開している。なかでも、第10回研究会では、大阪産業労働資料館館長（谷合佳代子氏）を招き、「公共の私立図書館」であるエル・ライブラリーの事例をもとに議論を重ねた。そこから、研究者による民間のアーカイブズへの関心・期待の現状とそれにむけた可能性が明らかになり、今後、本部門と当該ライブラリーとの連携にむけた先駆的活動を進めることとなった（詳細は次項）。なお、2017年度以降も、同様の方針で研究会を開催していく。

表1 部門研究会概要

第1回：2014年2月22日	「石炭産業研究における資料アーカイビングの現状と課題」 報告者：嶋崎尚子（早稲田大学教授）
第2回：2014年4月23日	「若手研究者から見たアーカイブ作成の効果と課題—教団資料データベース作成の現場から」 報告者：平野直子（早稲田大学助手）
第3回：2014年7月26日	「裁判記録の学術利用をめぐる可能性と課題」 報告者：藤野裕子（東京女子大学准教授）
第4回：2014年11月29日	「伝記の資料所蔵先」鶴見太郎（早稲田大学教授）

第5回：2015年1月28日	「浜通りにおける震災アーカイブズの課題と可能性―「はまどおりのきおく」の実践から」 報告者：川副早央里（早稲田大学博士後期課程）
第6回：2015年3月23日	「『社会的』記憶装置としてのアーカイブ―アーカイブの課題と展望」 報告者：原科達也（早稲田大学講師）
第7回：2016年1月7日	「日本鉱業における労働衛生史に関する一次・二次資料」“Primary and Secondary Sources for a Long History of Occupational Health in Japanese Mining History” 報告者：Bernard Thomann（National Institute of Oriental Languages and Civilization of Paris (Inalco Paris) 教授）
第8回：2016年1月27日	「労働史オーラルヒストリー・アーカイブの試み―映像化の取り組みと資料の利用可能性を中心に―」 報告者：梅崎修（法政大学キャリアデザイン学部教授）
第9回：2016年12月1日 （早稲田大学大学院社会学院 生研究会との共催）	「鉱業アーカイブの現状と可能性―カナダとドイツ巡検記録の活用」 1. 「ドイツ・ツォルフェライン炭鉱産業遺産群を訪ねて」 報告者：川副早央里（早稲田大学助手） 2. 「炭鉱機械の保存と坑内労働の記憶―カナダ・スパーウッドを訪ねて」 報告者：清水拓（早稲田大学博士後期課程） 3. 「“炭鉱の子どもたち”の作文を保存・分析する意義と課題」 笠原良太（早稲田大学博士後期課程）
第10回：2017年3月4日	「市民参加の労働アーカイブズ：エル・ライブラリーの事例」 報告者：谷合佳代子（大阪産業労働資料館館長） パネラー：島西智輝（東洋大学経済学部准教授）



〈ワークショップの様子〉

個別アーカイブズとの連携事業

本部門では実践的な活動として、個別アーカイブズとの連携事業を進めている。第一は、釧路市教育委員会所管アーカイブズとの連携である。代表者の調査フィールドである北海道釧路市は、日本最後の炭鉱が稼働する唯一の石炭産業都市である。同市は、市立博物館を中心に、アーカイビングへの積極的理解・活動の蓄積があり、かつ現在その転換期を迎えている。また、2016年11月には、文学学術院と北海道釧路市との相互協力に関する協定が締結された。本部門では、今般の協定締結を機に、当地でのアーカイブズ（「太平洋炭鉱資料室」）の維持・更新という実践的検討に着手したところである。第二は、先述の大阪産業労働資料館エル・ライブラリーとの連携活動である。2017年5月6日・7日に同館を訪問し、アーカイビング技術を中心としたワークショップをもち、資料保管の現状と保管方法に関する詳細な説明を受け、理解を深めたところである。

本部門活動の意義

本部門の活動は、主要にはアーカイビング実践を情報として提供しあい、その方法論的課題を検討するという、いわばメタ水準の研究活動である。それゆえ、他部門とは異なり、直接的・可視的な成果の産出は容易ではない。むしろ、本部門活動成果は、間接的に部門メンバーの研究実践上に現れることが期待される。とはいえ、本部門が総合人文科学研究センターに設置されていることの意義は大きい。第一に、戸山キャンパス内の異なる専門領域の研究者が、アーカイビング実践において同じような経験や課題を抱えていることを共有し、課題解決をさぐることによって、各自の研究遂行上のヒントを得ることにつながる。第二に、本部門には、多くのキャリア初期研究者が積極的に参加している（招聘研究員（いずれも40歳以下）、大学院生と学部生が10名程度）。社会学、教育学、歴史学を学ぶ学生たちである。彼らを含め、アーカイビングという地道な作業の実践者たちが、相互に刺激しあう機会は、若手研究者への教育機会となり、戸山キャンパスでの研究活性化に貢献している。